昆布山谷集落跡

石見銀山における中心的な名所の 1 つである龍源寺間歩への入り口から 200 メートルほど離れた所にあるのが昆布山谷です。石見銀山が 16 世紀後期から 17 世紀初期にかけて栄えると、丘の斜面一帯に大きな鉱山労働者のための集落が造られました。岩盤へと掘られた多くの坑道から便利な距離の場所にある、平坦で階段状になった土地の上には、家々や銀を加工するための施設が建設されました。昆布山谷の集落は長きにわたり存続することとなりました。集落は数世紀にもわたって段々と拡大していき、明治時代（1868–1912）までは人々が暮らしていました。集落がこれほど長く存続した理由の 1 つが、石見銀山付近にある仙ノ山の麓に近いという比較的便利な立地でした。しかし、集落が低地にあったことは災いの素ともなりました。昆布山谷はしばしば洪水に見舞われ、時には深刻な被害を受けることがあったのです。

昆布山谷の上側には新横相間歩があります。新横相間歩は江戸時代（1603–1867）中頃に開発されたもので、昆布山谷の鉱山労働者たちの創意工夫の証となっています。垂直に伸びる銀脈に届くように、新横相間歩は山腹に対して水平かつやや上向きの角度で掘られています。こうすることで採掘により出てきた地下水が流れ出すのです。従来の坑道は 1 つ以上の銀脈に対して並行して真っすぐ下向きの角度で掘られていました。しかし、そうした坑道は遅かれ早かれ水でいっぱいになってしまいます。こうした革新的なタイプの坑道を発明したことに加えて、昆布山谷の鉱山労働者たちは、その地域に埋まる銀が掘り尽くされると、銅の採掘を始めました。こうした取り組みは明治時代でも続けられました。明治時代に藤田組という企業が石見銀山の権利を手に入れると、近代的な鉱石の選鉱および精錬施設を昆布山谷に建設したのです。それらの機能は 20 世紀に入る頃に近くにある柑子谷の地域へと移されました。こうして 350 年間近く採掘が行われてきた昆布山谷に静寂が訪れたのです。